

「江蘇大学研修参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 前川達彦

この報告では、訪問の内容、学習成果、現地での経験、進路への影響の4点について順に記す。

今回のプログラムでは、京都大学文学研究科の大学院生が、江蘇大学（中国江蘇省）を訪問した。訪問先では、両大学の大学院生による研究発表、大学施設の見学、大学院生間の交流などの活動がおこなわれた。研究発表では、両大学の大学院生がそれぞれ取り組んでいる研究について紹介をおこない、限られた時間ながら質疑応答も実施した。私は、戦争と平和をめぐる集合的記憶についての発表をおこない、今後の研究方針について質問と助言を得ることができた。大学見学時には巨大な大学図書館に入館し、学生に対して多量の情報が提供されている様子を直に見ることができた。さらに、滞在期間のほぼ全体をとおして大学院生と交流できたことで、日本（語）研究の様子を知る機会になっただけでなく、温かい気遣いに触れることもできた。

江蘇大学訪問をとおして、次の点について学ぶところがあったことは、今回の成果であると考えている。第一に、専門や言語を異にする人々を前に発表することで、自身の研究を広い視野から考える契機になった。江蘇大学の大学院生向けの発表用資料を準備する段階で、自身の研究内容を効果的に紹介するためにはどのような資料を提示するべきか、どのような言葉を選ぶべきか慎重に考えることができた。準備に力を注ぐことによって、研究内容を客観的に検討しなおすことができ、今後の研究に盛り込むべき内容をも明確にすることができたと感じている。第二に、研究対象にかかわる関心の幅が広がった。これまでは、もっぱら日本の出来事についてのみ関心が向いていた。しかし、今回の訪問をとおして、日本国内の出来事も海外の動きとの関連の中にあることを肌で感じた。そして、史料を収集する過程で、中国を含む海外の出来事を踏まえた視点を備えていれば、より視野の広い研究になるのではないかと考えるようになった。

また、訪問中は江蘇大学の教員および大学院生から身に余るほどの歓迎と親切を受けた。これは、現地での経験の中でも非常に印象深いことである。移動や食事などの場面では、的確かつ丁寧な手助けを何度も受けた。私は中国語をかつて短期間だけ学習したものの使用することができない。そのため、どの活動も円滑におこなうことができたのは、いつもサポートしてくれた教員、大学院生のおかげである。このことは学習成果と併せて、今回の訪問を意義深く、また思い出深いものにした要因のひとつである。

現段階では、今回の江蘇大学訪問が将来の進路選択を根本的に変え得るかどうかは判断できない。しかし、すでに述べたような学習成果は、研究を進めるうえで必ず助けになるだろうと考えている。また、どのような進路を取るにせよ、異なる地域からやってきた多様な人々とかかわる機会があれば、できる限りの気遣いができるようになりたいと心から感じている。